

# SHOW HEY シネマ 4

★★★★★

## NEW シネマ歌舞伎 四谷怪談

2017年・日本映画  
配給／松竹株式会社・118分

2017（平成29）年8月8日鑑賞

松竹試写室

Data

監督：串田和美

出演：二代目中村獅童／六代目中村  
勘九郎／二代目中村七之助／三代  
目中村扇雀／四代目中村橋之助／  
二代目中村鶴松／真那胡敬二／大  
森博史／首藤康之／笹野高史／四  
代目片岡亀蔵

### ■ショートコメント■

◆こりゃ面白い！勉強になる！しっかり楽しめる！しかし、本作については、私が書く評論を読むよりも試写室でもらったプレスシートをしっかりと読む方が役立つはずだから、それをそのまま紹介しておく。

#### ■イントロダクション

中村獅童、中村勘九郎、中村七之助、そして中村扇雀ら 豪華俳優競演！  
誰も観たことのない『四谷怪談』が、圧倒的な臨場感と映像美でスクリーンに登場！

歌舞伎の古典演目を、新たに現代的な感覚で描くコクーン歌舞伎。1994年に十八世中村勘三郎らによってスタートして以来、毎回その斬新なスタイルが話題となり、現代に生きる歌舞伎の魅力を発信し続けています。

昨年、第15弾作品として上演されたのは、第1回目にも上演されたコクーン歌舞伎の原点といえる『四谷怪談』。キャストには中村獅童、中村勘九郎、中村七之助、そして中村扇雀に加え、歌舞伎界きっての個性派片岡亀蔵、実力派俳優笹野高史、世界的バレエダンサー首藤康之ほか、個性豊かな面々が集結しました。

シネマ歌舞伎版では、舞台のエネルギーはそのままに、様々なアングルやアップを駆使した映像の迫力とコクーン歌舞伎ならではの芝居小屋のような臨場感が共存する新感覚の映像作品に。新たな四谷怪談の世界がスクリーンに広がります。

## 日本で最も有名な怪談話『四谷怪談』

四世鶴屋南北によって書かれた『東海道四谷怪談』は文政八年(1825年)、中村座で初演されました。南北が活躍したのは江戸時代後期、江戸の町人を中心とした化政文化が花開いた頃。人々を楽しませるために、多種多様な文化が互いに競い合い、刺激し合いました。南北は『四谷怪談』の物語を「忠臣蔵」の世界を背景にして描き、『仮名手本忠臣蔵』と場面をクロスさせながら、二日ばかりで上演。不倫をした男女が戸板に釘付けにされて川に流されたという四谷左門町の「於岩稲荷」に伝わる巷説など、当時の江戸で起きた事件や出来事を題材にして書き上げたこの作は、大入り続きでたちまちのロングラン、大人気作となりました。特に、お岩様の怨念は怪談話として広まり、歌舞伎にとどまらず、現代でも舞台、映像、書籍などで取り上げられるほど、人間の業と恐ろしさを普遍的に描いた物語として強い影響力を持ち続けています。

### 東海道四谷怪談をモチーフとした作品

落語『四谷怪談』(三遊亭圓朝)

小説『喰う伊右衛門』(1997年 京極夏彦)※2004年に監督:蛭川幸雄、出演:唐沢寿明、小雪で映画化

映画『忠臣蔵外伝 四谷怪談』(1994年 監督:深作欣二、主演:佐藤浩市)

映画『喰女-クイメ-』(2014年 監督:三池崇史、主演:市川海老蔵) ほか多数

## 現代劇としての歌舞伎「コクーン歌舞伎」

1994年、十八世中村勘三郎によって渋谷の街に誕生したコクーン歌舞伎。第2弾公演からは串田和美が演出として参加し、「いまを生きる現代劇としての歌舞伎」のあり方を模索してきました。

従来とは違う角度から光を当て「歌舞伎とはこういうもの」という概念を打ち破り、俳優が役を各回交互で演じたり、ギターなど様々な楽器のライブパフォーマンスやラップを使用したり、同じ演目を現代劇版と歌舞伎版とで連続で上演したりと、毎回新たな試みに挑戦しています。こういった試みはただ単に目新しさだけを追い求めたものではなく、戯曲の根底にある作者の思いを読み解き、現代の感覚で表現したらどうなるかを突き詰めた結果なのです。

## 「コクーン歌舞伎」だからこそ描くことができる『四谷怪談』

歌舞伎『東海道四谷怪談』ではお岩が怨霊になった後の隠亡堀の場での「戸板返し」「提灯抜け」「仏壇返し」などのケレン※が有名ですが、本作ではそういった仕掛けを使わずに、登場人物たちの思いに焦点を当てた新たな演出で描き出しています。(※ケレン…大がかりで見た目に派手な演出のこと。)

「怪談とはなんなのか。人は生きていく以上、いい人、悪い人の両方の要因を持っている。伊右衛門は刀で人を斬るからわかりやすいけれど、誰もが見えない刀で人を斬っているかもしれないし、人から呪われているかもしれない。伊右衛門の頭の中に渦巻く迷いや恐れ、それでも生きようとする思いこそが、どんなに目まぐるしく時代が変わろうとも、変わらずにあることではないのか。」と語る串田監督。その集大成ともとれるのが、最後の「夢の場」のシーンです。まるで伊右衛門の頭の中をの

ぞき込んでいるかのような混沌の世界で、さまざまな人がさまざまな速度で行き交い、話し、騒ぎ、通り過ぎていきます。耳に飛び込む音もさまざま。伊右衛門とともに、鮮烈な視覚と聴覚のラビリンスに迷い込み、見たことのない『四谷怪談』の世界を体験することになるでしょう。

また、今回の演出で特徴的なのは、たびたび登場するサラリーマンたちです。自我もなく、ただ淡々と流れに沿って歩く人々。本作では、討入りに奔走し忠義に生きる武士たちの表舞台「忠臣蔵」の裏側で、伊右衛門たちのように社会に折り合いをつけて生きていくことがままならない人々々がもがき苦しみ、時代に抗いながら生きている姿が描かれています。

『四谷怪談』はお岩一人の恨みを描いた物語ではない。世の中全部が怪談だよと南北がささやいている。

現代も気が付けば、亡霊ばかりが街を行きかう。

無数の怨念がなだれ込む『四谷怪談』は、あの世もこの世もひっくり返るため、怪なる世界へ変貌する。

南北はあの世で高笑いするだろうか。

監督・串田和美

### 新しい映像体験 シネマ歌舞伎、NEW シネマ歌舞伎について

シネマ歌舞伎はHDカメラで撮影した歌舞伎の舞台公演を、映画館でのデジタル上映で楽しんでいただく新しい観劇空間です。俳優の息遣いや衣裳の細やかな刺繍まで見ることができる映像の美しさは生の舞台とはまた異なる、シネマ歌舞伎ならではの魅力です。サウンドも、映画館の最新音響設備での再生を前提に、舞台の臨場感を立体的に再現しています。歌舞伎芝居の持つ本来の面白さ、美しさ、そして心を打つ感動の場面の数々を分かりやすく、身近に感じてもらいたいという願いのもと、全国で上映を行っています。

本作は舞台で演出・美術を務めた串田和美が引き続き監督を務めた、NEW シネマ歌舞伎の2作目となります。舞台を観た人にも、観ていない人にも常識や予想を覆す体験をしてほしい、と舞台上での撮影や新たな追加撮影などを敢行し、編集に編集を重ねてブラッシュアップ。ライブの舞台の躍動感、スピード感、エネルギー、ドラマを生かしながら、映像ならではの演出も加わり新たな魅力を持つ映像作品に仕上がっています。

### ■あらすじ

これは夢か、この世の果てか。欲望が引き起こした2つの殺人をきっかけに、すべてが崩れ始める――

伊右衛門は、妻のお岩を連れ戻された恨みから舅を殺害。一方、直助はお岩の妹お袖に横恋慕しお岩の許嫁・与茂七を殺してしまう。伊右衛門と直助がやったと知らず悲しみにくれる姉妹を二人は騙し、敵討ちを約束する。やがて伊右衛門の子を産んだお岩は産後の病に苦しみ、隣家の伊藤喜兵衛からもらった薬を飲むが、顔をおさえ苦しみます。実は、お岩を毒薬で醜くして伊右衛門と離縁させ、孫娘のお梅と添わせる喜兵衛の企みだった。苦しみ、絶命したお岩。その怨念が伊右衛門を次第に狂気へと向かわせるのだった…

